霊亀山天龍資聖禅寺は五山の第一なり、大井川の北にあり。開基は夢窓国師、諱は智曜、又疎石と号し、あるひは木納叟とも称す。勢州の人なり、姓は源氏にして宇多帝九世の孫なり。母は観音に祈り、金色の光西より来るを呑よと夢みて姙し、十三月にして誕生す、四歳にて母におくれ、九歳のとき平塩教院に至り出家し、十歳にして法華経を七日に誦し、母の恩に報じ、みづから母の死屍九変の相を画て独坐観想し、十八に至り慈観律師に礼し具足戒をうけ、三年が間顕密の教をならひしかど、猶も大道の発明に足らずとて道場を建、百日聖慮を求められしに。期満の日過て座中恍然として夢の如く覚え、一僧来り夢窓をひき一寺にいたる、寺を疎石といふ、又一寺に至るこれを石頭といふ、其内に一人の長老あり、夢窓をむかへ持たる一軸をあたへてよく奉持し給へといふ。寤て後夢窓これをひらき見るに、達磨半身の画像なり。夫より志を定め禅観に帰し、名を疎石とあらため、字を夢窓といふ。観応二年九月三十日七十七歳にて寂し給ふ。当寺の本願は足利尊氏公、後醍醐帝追福の為に御建立ありしなり。〔いにしへ此地に檀林寺あり。荒廃して其後、後嵯峨院、亀山院等仙洞をいとなみ、吉野の桜をうつし、宸殿の西には薬草院、東に如来寿院をかまへ、小倉の山戸難瀬の瀧もさながら御垣の内に見えて、画工の筆力にも及びがたし。又中書王といふは、延喜の御子兼明親王の事なり、清慎公の讒によりて是なる山荘に籠給ひ、兎裘の賦を作り給ふも此所なるべし〕仏殿の本尊は釈迦仏、脇士には文珠普賢を安置す。壇上の牌には天照皇太神の銘あり、梵天王、帝釈天、達磨、臨済、百丈の像は左右の壇上に安置す。〔いにしへの仏殿を覚皇宝殿と号す、堂前に其跡あり、仏殿はむかしの法堂なり〕昭堂は聯芳となづけて、

開山の像、尊氏の像、地蔵尊を安置す。〔これは尊氏公の念持仏なり〕又堂内に開山七朝国師号の勅書七通を刻、方丈の庭は夢窓国師の作にして、池を曹源池といふ、書院を集瑞軒となづく。塔頭多宝院には後醍醐帝の御廟あり。同金剛院の開基は夢窓の上足普明国師にして、光厳院帝の御廟あり。同真乗院は笑山和尚の開基にして、細川常光の茶店あり、其前に水盆あり、是亀頂塔の礎石なりとぞ。〔いにしへ天龍寺に九重の塔あり、これを亀頂塔となづく〕